つどい

第 450 号
2026.4.1

発行・豊中歴史同好会
責任者 小川 滋

古墳時代中期の軍事と武器副葬をめぐる諸問題

奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員
田中 晋作

はじめに

古墳時代中期半ばあるいは後半から、甲冑を中心にした組成として整った武器に伴って、少量の農工具が出土する中小規模古墳がみられるようになる。このような少量の農工具は、『つどい』三八九号でも述べたように、古墳被葬者の各種生産等への関与を象徴するものとしてではなく、すべてではないにしろ、移動や駐留に対応できる、武器組成に組み込まれた農工具として副葬されたと理解してきた（田中 2020）。

一方で、この理解について、最近「儀器を含むことが多い古墳副葬農工具の共伴などでは根拠が弱く、現状の資料状況との間に著しい飛躍がある」との指摘を受けている（橋本 2022）。本稿では、新たに、副葬された農工具に明確な用途、役割の違いがあったことを明らかにすることによって、この指摘に答えたい。

以下では、豊中市桜塚古墳群東群において、武器の副葬が卓越した首長墓系譜を構成する古墳を取り上げ、このことについて考える。具体的には、各首長墳（墓）で共通してみられる、ふたつの埋葬施設における農工具の副葬状況と構成の推移から、中期後半の北天平塚古墳を境にして上記のような現象が現れることを示し、このことが古墳時代中期の軍事の実態を反映したものであることを述べる。

1．桜塚古墳群東群における農工具の推移

桜塚古墳群は、大阪府と兵庫県を分ける猪名川の左岸、豊中丘陵上に広がる中型古墳群である。西群・東群・中央群の3群から構成された本古墳群は、かつては「桜塚村三十六塚」の名で呼ばれたが、現在ではわずか5古墳（大石塚古墳・小石塚古墳・大塚古墳・御獅子塚古墳・南天平塚古墳）を残すのみとなっている。本古墳群の形成

古墳時代中期の軍事と武器副葬をめぐる諸問題　田中 晋作
葛城中部の遺跡を訪ねる　古高 邦子